
【 ANNIVERSARY-4/1邂逅記念- 】 R E U N I O N

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ANNIVERSARY - 4 / 1 邂逅記念 -」 R E U
N I O N

【Nコード】

N 6 4 4 2 K

【作者名】

真木 葵

【あらすじ】

4 / 1 探偵と怪盗の運命の出会い、邂逅記念日。
杯戸シティホテルの屋上で、工藤新一は消えてしまった怪盗を待ち続けた…。

…夜の静寂を壊さぬ様に、そいつは静かに俺の目の前に降り立った。

…何もかも見透かした様な、不適な笑みと共に。

懐かしいな、憶えているか？

あの時、俺はまだ小さな姿でこのビルの屋上に居た。

春先とは言え夜はまだ冷たい風が吹く中、寝静まった街中を抜けてここへやって来たんだ。今時、予告状を送りつけてくるレトロな泥棒に逢う為にな。

あれから一年。

コナンの姿で何度もお前に遭遇し、捕まえ損ねてきた。最初の出会いから、あの日、お前が組織の凶弾に倒れるまでは…。

この杯戸シティホテルから飛び立つ振りしてハンググライダーを広げたお前は、袖口からフィルムケース大の閃光弾を落として光の中で俺に言ったな。

…怪盗は鮮やかに獲物を盗み出す創造的な芸術家だが

…探偵はその跡を見て難癖を付けるただの批評家に過ぎないんだぜ

ああ、正直腹が立ったさ。

コソ泥風情が何キザな事を言っただけやがるってな。

機械も使わずに何人もの声色を使い分ける、一瞬で消えたと見せかけて集まった警官の中に紛れ込む、大胆不敵に白い羽を広げてこの月下を飛ぶお前を、俺は半ば躍起になって追っていたさ。それまで泥棒なんぞに興味もなかった俺が。

それだけ俺にとっては格好の獲物だったよ、いくら宝石を守ろうが俺の指先に触れる事の無いお前の実態、この目の前から意図もたやすく逃亡してしまうお前を、何が何でも捕まえてやりたいと必死になって追い続けていた。

「勝ち逃げしてンじゃねーよ」

俺を守ったくらいで姿を眩ましてんじゃねーよ、さっさと出てこいよ怪盗キッド。お前に借りがあるままじゃ俺の気が済まねーよ。捕まえてやつからもう一度俺の目の前に現れる。

「…あの馬鹿」

お前が身に纏っていたあの白い衣装を思い出させるような白銀の月光でさえ、あの時のお前をフラッシュバックさせる。鮮血に染まる白い怪盗、俺の目の前でただ一度だけお前が見せた、ポーカーフエイスが崩れた瞬間。シルクハットとモノクルだけでは隠しきれなかった、苦痛に歪むお前の顔。

笑わせンじゃねーよ、どうせ演技だったんだろう？お前には何度も騙されてきたからな、今更信じられるかコソ泥の猿芝居なんかよ。

出てこい、怪盗キッド。

最初の出逢いを思い出させる、再会には御誂え向きの月夜じゃないか。

「何故、戻らないんだ…」

帰ってこい、お前はあんな所で死ぬ奴じゃない。
そんな事は俺が認めない。

(キッド…)

(キッド…)

ギイ…

鉄のドアの蝶番が錆び付いた音を鳴らす。俺は微かな人の気配を感じて振り返った。このホテルの職員だろうか…逆光で顔がハッキリと見えないが、俺と背丈の変わらない人の姿がそこにあった。

アイツを待っているつもりだったが、時刻は既に深夜だ。他の人間が居たんじゃ、仮にアイツが生きて居てもここへ来る筈はない。

俺は再び空へと視線を投げる、この闇夜の何処かを、アイツが飛んでいるかも知れない。例えば俺の目の前に現れなくても良い、アイツが無事である事さえ解ればそれだけで良かった。

今でも鮮明に脳裏を過ぎる、あの映像を掻き消したくて。

ただひたすら待ち続けたい。

「情けねー事にまだ左腕が完治してないんでね、空は飛べないんだよ」

え…？

俺の声にそっくりな声が背後から聞こえてくる。慌てて再び振り向くと、屋上へ出て来たさっきの男が、靴音も鳴らさずにそっとこっちへ近づいてきていた。

消そうともしない気配、極一般人の放つ気配、気取らず隠さず、まるで俺を知り合いだと思っているようなそんな素振りで、迷わずこちらへと歩いてくる。

「誰だ…」

その男に問い掛ける自分の声も、何処か語尾が震えていた。恐怖ではなくて、緊張でもなくて、確かめるように目を細めてその男を視認する。同い年くらいの少年、この時期にしては少しだけ涼しそうな上着とジーパン姿。手ぶらで、まるでコンビニにでも立ち寄ったかの様な素振りで。

「…よう坊主、何やってんだ？こんな所で」

両手をポケットにしまったまま俺の方へ向かうその男は、しっかりと俺の目を捕らえてそう言った。その言葉がまるで俺の頭の中にハウリングを起こすかの様に響き渡る。そう、一年前のあの日、ここで初めて出逢ったアイツに言われた台詞だ。

「…お前、まさか…」

「何だ、こんな所に居るからてつきり“オレ”の事を待っていてくれたのかと思っただけだ」

戯けた台詞でクスリと笑う。ここは俺にとって奴と最初に出逢った場所、ここに居れば奴がいつか現れると踏んでいた。しかし目の

前の男は、どう見ても一般人。…アイツの変装だろうか、少しだけ今の俺に面影が似ている。

「何者だ」

「解んねーの？」

淡い月光が照らし出すその顔、記憶の中だけに在ったあのシルクハットとモノクルを重ね合わせる。隙のない身のこなしで俺の目の前に現れていたあの怪盗の素顔…一度も見たことがなかったけれど、何故か俺の脳が同一人物だと警告を発した。

そしてそれに気が付いたかのように、ソイツは嘲笑う。

「名探偵が淋しそうにしてたから地獄の底から戻って来てやったっつーのによ」

そう言っただけ、俺は何も持っていなかった右手を虚空に広げて円を描く様に空を握る。呆気にとられている俺の目の前へと差し出した右手を、そっと広げた。

「…お前が、持っていたのか…」

小学生の体では限界が在った、組織を追う上で俺は冷静さが欠けていた。奴らの銃口を目の当たりにした際に死を覚悟した。しかし…奴らの放った凶弾は俺の前に立ち塞がった白きマジシャンの体を貫いていた。

「探偵・江戸川コナンの代名詞だろ？あの場で奴らと一緒に燃え滓になるには勿体ねーからな。…ま、オレには必要ない代物だけど」

俺はそっと、こいつが俺の元へ戻してくれた懐かしいアイテムに

触れた。所々が黒く煤けてしまっていたが、間違いなくこれは俺がコナンとして愛用していた蝶ネクタイだった。

「何故だ」

「…何が」

「それはお前の素顔か？」

「さあね」

認めたくはなかったが、面影だけ見れば俺とこの男は良く似ている。背丈も声も。何度か工藤新一に変装していた奴だから多少は外見が似ているのかも知れないとは読んで居たが、まさかこれが本当の怪盗の素顔だというのか。

そうだとしたら、何故晒す…探偵である俺の目の前で…

「探偵なら自分で確かめるよ、真相って奴を」

罨か挑発か。

ソイツは動じる事なくポケットに手をつ込んだまま、俺の目の前で目を閉じた。ビル風が俺たちの頬を掠めて行く。…今日はエイプリルフル…こいつは本気で素顔を晒しているんじゃないのかもしれない。

けれど俺の手は黙って動いた。脳の命令系統を“好奇心”が支配する。

瞑ったままの瞳の側、ソイツの頬に…指先が触れる。

ぎゅっと抓れば、変装ならマスクが剥がれる。部分的な変装でも、表面に皺が寄る。

そのまま指先に力を入れてみれば、答えが解る。

奴の提示した真相を、確かめてみよう…

「早くしろよ、くすぐったいだろ」

片目を開けて俺を睨む、確かに笑いを堪えている様だ。指先に触れた感触は確かに人の肌だった。特殊な物ならそれだけじゃ解らないと知っている。けれど…俺は…

「…遅せーんだよ、このコソ泥が。今まで何処ほつつき歩いていやがった」

もうそれが変装なのかどうなのか、関係なかった。

「工藤…？」

「テメーに死なれちゃ後味悪いんだよ、生きてるなら生きてるってさつさと連絡寄越せ、ふざけるな、この馬鹿、怪盗風情が心配かけさすんじゃないよ」

「……」

なんつー顔してんだよ、何か言い返せよ。俺はお前を罵っているんだ、何か言い返す事があるうだろう？ 仮にも俺はお前に助けられたんだよ、黙ってねーで何とか言えよ。

「悪リイ」

は…？ 何謝ってんだよ、気色悪いーな、お前本当にあのキッドなのか？ いつもの様に不適な笑みで人を蔑んで見ろよ…なんで…なんで…で…

「包帯だらけの姿じゃ、お前に逢いに行けなかったんだよ」

「…キッド…」

奴の目が怪盗とは思えない程、優しい色を宿していた。名前を呼ばうとして、俺の喉から出た語尾に、微かに涙が混じっている事に気が付いた。

「オレの使命も終わったんだ、お前があゝの組織を潰した日にな。キッドはもう二度と現れない、役目を終えて月光の向こうへ還ったんだよ」

月を見上げるそいつは、誰かに何かを語りかける様に目を細めて呟いた。

酷く淋しげな風に。

「お疲れさん、名探偵」

「…ああ…」

何も、わざわざ素顔で俺の目の前に現れなくとも、何処かでキッドがまた犯行をし始めればそれでいいと思っていた。そうしてまた俺はキッドを追い続ける、奴の暗号を解き、奴のトリックを見破り。そんな日々に戻れればそれでよかった。

けれどこいつは、怪盗から元の生活へと戻り、キッドの仮面を脱ぎ捨てた。ただ俺が怪盗の安否を気遣って居た事を知っていて、こうして目の前に現れた…

本当の姿で。

「悪かったな、お前が居なければ俺は工藤新一にも戻れず、あのまま死んでいた」

「ならオレも礼を言わなければいけない。お前が居なければまだオレはこの姿に戻れず、怪盗を続けていなければいけなかった…。いつ終わるとも解らない戦いを」

「…そうか」

「…ああ」

どちらからともなく差し出した手を、俺たちは堅く握り合った。この男が何を思っているのか解らなかったけれど、俺と同じような心境だろうと思う。全てが終わり、互いの呪縛が解け、元の姿で再び始まるこの生活を、少しだけ憂う気持ちで待ち望んでいた事を。

「じゃーな、名探偵」

「フェアじゃねーな、名前くらい教えるよ」

去り際の男に問い掛けると、まるで悪戯を企む子供の様な表情で俺を見る。

「知りたきゃ捕まえろよ、探偵だろ？工藤新一」

「二度とキッドは現れないんだろ？どうして捕まえる事が出来る」

「出来るさ、お前なら」

怪盗の面影を感じさせない、月下の奇術師ではなく照りつける太陽の下が似合うようなそいつは、気持ちが良い位に楽しそうな笑みを浮かべている。

まるで俺に捕まるのを、楽しみにしていると言いたげな目で。

「灯台もと暗しつてな。…案外すぐ側に居るかもよ」

そして、じゃーなと手を振ってその男は去っていく。

あいつが何故怪盗をやっていたのか、何故組織が壊滅して使命を終えたのか、俺には解らない。あいつは俺に何も告げずに去って行く。名前も、居所も、何も告げず…素顔だけ晒して消えていく。

「解ったよ」

上等じゃねーか、絶対見つけてやるぜ。

その後、俺は元通りの生活に戻った。コナンになってしまっ前と何一つ変わらない生活。相変わらず海の向こうで生活する両親からの音沙汰はなく、幼馴染みと共に学校へ通い、目暮警部に呼び出されては現場に赴いて時折マスコミの取材に応じている。

あの男を本気で捜そうと行動を取る事もなく、ただのんびり流れる日々を横目で眺めている気分だった。何もする事のない時間を読書に明け暮れ、あの激動の日々の疲れを癒すかの様に、訪れた春の陽気にうとうとと揺蕩う。

ソファの前のローテーブルに起きつぱなしのコーヒーの湯気がそっと日差しに吸い込まれて消えていく。膝からぱさりと落ちた読みかけの新聞。浅い眠りから目覚め、やたら壁時計の音だけが大きく聞こえた。ゆっくりと手を伸ばして、今日の朝刊を拾い上げる。…

そしてふと目に入る。

「…まさか…」

先日の強盗殺人を解決した際に受けた取材、俺の写真が載っていたその記事は既に読み終わっていた。けれど別の欄にも俺の写真が載っている。驚いてそれをローテーブルに広げた。

似ているけれど俺じゃない、タキシード姿で…戯けた顔で…子供の様にカメラに向かいピースサインを送って居る少年。俺は食い入るようにその写真の記事に目を通した。

新人マジシャン…そう書かれている、俺の脳裏にフラッシュバックが起きる。あの日、俺たちの再会の夜にアイツが言った言葉。

『灯台もと暗しってな。…案外すぐ側に居るかもよ』

すぐ近くのホールで、今夜から二日間マジックショーをやるとの宣伝の記事だった。俺は居ても立っても居られずにそのままリビングを出た。財布と携帯だけポケットに入れて家を出る。

…あいつを捕まえに行く為に。

途中の花屋で豪華な花束を買ってやろう、楽屋に押しかけて一言言っただけでやらなきゃ気が済まねー。お前のマジックの仕掛けなんぞ全部俺が当ててやる。つまらないショーだったら承知しないと。

お前を捕まえて全部吐かせてやるから覚悟しろ、黒羽快斗。

淡い月光が俺たちを照らし出す、その前に…。

彼には生前とてもお世話になりました。そう礼を言つてオレと母さんに頭を下げた男は、今日日本で3本の指に入ると言われているマジシャンの一人だった。東洋の魔術師と称されていた父さんは、オレにとっては世界一のマジックの使い手。しかしそんな父さんだったが、一人も弟子を取らなかったと母さんや寺井ちゃんから聞かされていた。

昔の思い出話に花を咲かせるように、その男は母さんにポツリポツリと話し始める。弟子と言う確固たる枠組みは無かったものの、父さんのマジックを慕い、父さんのマジックの存在のお陰で今の自分があると説明するその男の話を、オレはただ聞き流すように呆然としていた。

「どうだろう、快斗君、君のマジックをお客さんの前で披露してみても如何だろうか」

その男がもたらした機会がチャンスだと解っていた。けれどオレはその時、即答できずにただただ体の傷の完治を待つばかりだった。

大事な幼馴染みや母さん、クラスメートも皆オレの傷を心配してくれた。流石に拳銃で撃たれたとは言えないから嘘を突き通した。土手っ腹の傷を見た寺井ちゃんと母さんは、文字通り顔面蒼白にな

り泣き崩れた。正直オレも流石に今回は死を覚悟したんだ。…全ての終わりは“怪盗キッド”の終わりと共にやってくるのだと。

だが、ふと脳裏に過ぎるアイツの表情。オレの仮の名を叫びながら必死になってオレを助けようとした。けれどオレはアイツの手を取らなかった。オレの事よりも先に優先すべき事を成せと突き放した。無理矢理そう言っただけで分かれてから、オレは二度と怪盗の姿にはなっていないかった。

アイツの事情は全て知っていた、けれどオレはパンドラの話すら奴にしていなかった。怪盗の使命が終わった事を知らないアイツは…もしかしたら怪盗キッドが死んだと思っているかもしれない。

幾ら宿敵とは言え、アイツがオレの死を望んでいるのだろうか…
今でもなお、あの黒く焼け爛れたオレ達の最期の戦場へと赴き、怪盗の生死を確かめる為に必死になっているのだろうか。

全ての終わりは、もしかしたら…
怪盗ではなく“黒羽快斗”としてアイツと出逢う事で始まるのかも知れない。

今日は四月一日。
何の因果か、オレが初めて“名探偵”と呼べるアイツに出逢った日だ。

左腕を釣る包帯を外し、服を着替え、あの時からずっとオレの部屋の机の引き出しの中で眠っていた奴の証である“蝶ネクタイ”を取り出した。幾人もの人の声音を出す機械、アイツの代名詞でもあるそのタイを持って…。

…逢いに行つてやるよ、工藤新一

再会を祝おうじゃないか、月下の淡い光の下でな

米花ホールの高い天井を突き破るかの勢いで、ステージ中央で両手を広げるマジシャンへと送られる大喝采は鳴り響く。照明が照らし出す少年はまだ高校三年生だと言う。しかしながら彼は世界的に名を馳せたマジシャン“東洋の魔術師”の一人息子だ。無名のマジシャンとは言え、かつての有名人のマジックを愛するファンが、少年を一目見ようと全国から集まった。

二時間と言うショーが、本当に短く感じられる位に彼の見せる奇跡のマジックは大成功を収めた。まるでコンサートかライブの様に会場はアンコールを掲げる。幕が下りて欲しくない気持ちは、誰もが一緒だった。彼の作り出す幻想の世界はそれ程までに完成されたショーであった。

スタンディングオベーションの会場で、一人だけ新一がそつと席を外した。最大の賛辞を受けるマジシャンの下へと一歩一歩と歩き出す。階段を降りていきながら、その手には豪華絢爛な花束が握られていた。

そんな新一の姿に気がついたステージ上のマジシャンは、表情を一点させた。子供の頃に両親から貰ったプレゼントの箱の中に、一番欲したモノが入っていた時を思い出させる気持ちになる。両手を

下ろして、片膝を付いた。ステージ下へと来た新一が、何かを呟いたが拍手で掻き消された。

マジシャンは新一から花束を受け取ると、左腕で抱えた。重量のある花束に思わず破顔する。そして右腕を差し出した。握手だと思いい、新一もそつと手を差し出すが…

「何が“確保”だ、遅せーっつーの」

新一は快斗に腕を引っ張られ、そのままステージ上へ無理矢理上がらされた。会場は何が起きているのか解らなかったが、まるで熱愛発覚された芸能人に野次を飛ばすかの様な指笛が所々から聞こえてくる。

「お疲れさん」

「…サンキュ」

二人は再び、握手を交わした。これは再会でもあり邂逅でもあった。

コナンだった新一と、キッドだった快斗。

…過去は穏やかに流れる時に埋もれ、二人の未来がようやく始まるうつとしていた…。

（後書き）

最後まで読んで下さって有り難う御座いました。

ブログにて「おまけの後日談」を掲載しております、作品を気に入って頂けたら是非ブログにもお立ち寄り下さいませ。

邂逅記念日おめでとう！これからも名探偵コナンとまじっく快斗を応援しております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6442k/>

[ANNIVERSARY-4/1邂逅記念-] REUNION

2010年10月28日00時40分発行